



希望を紡ぐ糸

～テラ・ルネッサンスの歩みと未来への展望～

認定NPO法人テラ・ルネッサンス 創設者・理事 鬼丸 昌也

地雷原に芽生えた希望の種

2001年、カンボジア。大学生の私は、地雷原の光景に衝撃を受けました。地雷は、人々の身体だけでなく、心までも深く傷つけていました。目の前で苦しむ人々を前に、「自分に何ができるのか」と自問自答する日々。その中で生まれたのは、「地雷問題の現状を日本に伝えたい」という強い思いでした。

帰国後、私は友人たちにカンボジアの現状を語り始めました。すると、共感の輪は徐々に広がり、講演会は90回を超えました。「一緒に活動したい」「応援したい」という温かい言葉に支えられ、2001年10月、テラ・ルネッサンスは誕生したのです。



カンボジアでの地雷被害者

紛争の傷跡を癒す「複合型支援」

テラ・ルネッサンスは、カンボジア、ラオス、タイ、ウガンダ、コンゴ民主共和国、ブルンジ、ハンガリー、ウクライナ、台湾、そして日本の10カ国で、紛争で苦しむ人々の自立を支援しています。

私たちの支援の特徴は、「複合型支援」です。地雷被害者、元子ども兵、難民など、それぞれが抱える課題は

異なります。そのため、職業訓練、識字教育、生計向上支援など、さまざまな支援を組み合わせ、一人ひとりに寄り添った支援を提供しています。

「ないもの」を満たし、「あるもの」を伸ばす

私たちは、支援を行う上で、2つの視点を大切にしています。1つは、「ないもの」を満たす視点。紛争によって、人々は家や家族、仕事など、多くのものを失っています。まずは、衣食住を確保し、安全な生活を取り戻せるよう支援することが重要です。

しかし、それだけでは不十分です。もう1つの視点、それは「あるもの」を伸ばす視点です。どんな過酷な状況下でも、人々は必ず何かしらの「強み」を持っています。その強みに光を当て、可能性を最大限に引き出すことで、真の自立につながるのだと信じています。



「あるもの」を育む支援

ブルンジでの挑戦： 粘土質の土地がもたらした希望

アフリカ中央部のブルンジ共和国は、長年の内戦により、多くの人々が貧困に苦しんでいます。ある地域では、粘土質の土地のため、農業が困難でした。人々は、「この土地では何も育たない」と諦めかけていました。

しかし、私たちは、この粘土質の土地にこそ可能性を見出しました。ブルンジには、古くから粘土を用いた陶器作りの文化があります。そこで、近代的な窯業技術と施設を導入し、住民による生産組合を結成。陶器の生産・販売を通して、地域経済の活性化を目指しました。

道のりは決して平坦ではありませんでしたが、住民たちの努力と熱意により、徐々に成果が現れ始めました。自分たちの力で生活を向上させる喜びは、人々に自信と希望を与え、地域全体に活気が戻ってきたのです。



ブルンジ事務所の仲間たち

平和の担い手を育む： 国内での教育活動

海外での支援活動に加え、私たちは、2021年より日本国内での教育活動にも力を入れています。佐賀県東明館中学校・高等学校と提携し、「グローバル人財育成事業」を展開しています。

この事業では、生徒たちが海外の支援現場の課題を学び、解決策を考え、実行するプロセスを体験します。ふるさと納税などを活用し、自分たちで資金を調達し、テラ・ルネッサンスと共に支援プロジェクトを企画・実施します。国や文化を超えた学び、そして実践を通して、生徒たちは「支援することの難しさ」と「人として助け合うことの大切さ」を肌で感じています。

また、講演活動を24年間続ける中で、数多くの自治体で職員、住民向けの講演を実施してきました。海外支援の中で学んだ、支援対象者が主体的に変化していくプロセスの中に、自分たちの地域をより良くするヒントがあると評価をいただいています。よりよい地域が増えることこそ、世界を平和にする道なのだと確信しています。



若者たちに平和の大切さを伝えていく

希望の光を未来へ

テラ・ルネッサンスは、これからも支援と教育の両輪で活動を続けていきます。世界で起きている紛争や貧困、そして人々の苦しみ。その現状を一人でも多くの人に知ってもらい、共に考え、行動を起こす。その小さな一歩の積み重ねが、世界平和へとつながるのだと信じています。

私たちは、希望を紡ぐ糸のように、人から人へ、心から心へ、平和の想いをつないでいきます。そして、すべての生命が安心して暮らせる社会の実現を目指し、これからも歩み続けていきます。



これからも支援と教育を軸に平和を目指していきます